

に落ち着く。フランスでもチケット騒動がニュースになっているらしく、ホテルのフロントの人が同情し、英語で「友達に聞いてみる」と言ってくれた。ありがたい話だった。

部屋でしばらく休んでいると、フロントから電話が来た。「友達に聞いたら何とかかなりそうだから、直接話をしてみても」と言われた。話を聞くと、どうやら本当に14日の日本戦チケットを持っているらしい。そこで「いくら？」と尋ねたら「4000フラン」と返ってきた。

当時のレートは1フラン≒27円なので、約108000円ということになる。いくら日本戦でも1試合にこの金額はなあ…と思い、「買う」とは言えなかった。

翌13日はトゥールーズの街を一日中歩いた。今と違って、まだ旅行者がモバイルを使い外国でインターネットを気軽に使える時代ではなかったため、日本語での情報収集は難しかった。あの、深夜に電話をかけてきた旅行会社の臨時事務所も開設されてはいたが、謝ることしかできず、頼ったところで事態が好転する気配は感じられなかった。もはや街を歩き、目に付くものだけを手がかりにチケットを捜し求めるしか方法がなかった。気分はどんどん落ち込んでいくばかりだった。

ただ一つだけ救いがあった。トゥールーズに日本人の知り合いがいたことだった。この知り合いは、サッカーには全然関心がなく、W杯に関する情報を現地にながらほとんど持ってはいなかった。今回の騒動が何ヶ月も前から分かっていたら、こちらから電話や手紙で相談して対策を講じる手立てもあっただろうが、そもそも6月11日になるまでチケットは当然あるものと思ってフランスに行こうとしていたのだから無理な話だ。

しかし、この知り合いは、何年もトゥールーズに住んでいたため、日常的なフランス語が普通に話せたのである。知り合いを介せば、当日、フランス人とスタジアム周辺でスムーズにコミュニケーションが取れる。もしかしたらチケットが手に入るチャンスが訪れるかもしれない。これが最後の綱だと思いつつ、当日の幸運に賭けるしかない状況だった。

さて14日、試合当日、トゥールーズの街は、前日までの様子から一変した。街中、溢れんばかりの日本人でいっぱいだった。特にスタジアム周辺は、まるで日本国内にいるような状況の中、フランス語や英語で「チケット」と書かれたプラカードを持った人があきらめきれずに大勢走り回っていた。チケットを持っていそうなフランス人、要するにダフ屋がいると、たくさんの日本人が周りを取り囲む。そんな光景があちこちで見られ、殺気すら感じる有様だった。観察していると、完全な売り手市場で、5000フラン、10000フランと足元を見て平気で吹っかけてくる。そんな値段でも、これだけ日本人がいれば手を上げられるものも出てくる。そんな言い値で買ってしまふ日本人が群がれば群がるほど相場が上がってしまう。ダフ屋も「クレイジー！」と言っていたほどの凄まじさだった。

見て思った。「こんなことまでして手に入れるW杯のチケットっていったい何？なんかやってられないなあ、もうやだなあ、日本に帰るか…」と、何が何でも試合を見たいという気持ちが失せていった。この思いを知り合いに告げ、試合は大スクリーンが設置されている野外のパブリックビューイングで観ようと提案すると、彼は従ってくれた。

スタジアムとは逆方向に、とぼとぼと歩き始めた。すると、途中で一人の日本人女性に会った。よく見ると、8ヶ月余り前、日本がこのW杯フランス大会への出場を決めたマレ

ーシア・ジョホールバルでのイラン戦の時、隣で観戦していた女性だった。

「おお、来てたのか」「でも、チケットがないの」「俺もさ、でももう日本に帰ることにしたよ」「だめ、私は見たい、スタジアムで見たい」「見たいって言ったって、ダフ屋から手に入れるしか道はないんだぜ、それもバカみたいな値段でさ」「それでも見たい、もう明日日本に戻らなきゃいけないんだもん、だからこの試合だけは絶対に観たい！」

そこで何を思ったのか彼女を手伝うことにした。そういう気持ちになった。キックオフまでまだ1時間あったし、それまでほかにすることもなかったし…そんな軽い感じだった。

女性と知り合いと私の3人で10分くらいあたりを窺っていると、チケットを売りたいがっている大学生くらいの男性3人組フランス人の存在に気づいた。ここで知り合いの登場だ。

話をすると、6000フランで売りたいらしい。日本円にして約162000円になる。知り合いがもっと安くならないかと交渉するが、3人組にはまったく譲る気配がない。そんな状況を彼女に伝えると「それでもいい。買いたい」と言う。

ここで思いもかけない事実が発覚した。「買うって、ところで6000フラン持ってんの？」と聞くと、「1000フランしかない」って言う。一瞬頭を抱えたが、「この現場に来るまでチケットがそんな値段になっているなんて考えもしなかったんだろうな。ま、俺はもうその気はないけど、彼女は見たいって言うんだから、それはそれで最後まで手伝うか…」そんな気分だった。手持ちで3000フランあった。足りない分は、クレジットカードを使って、近くにあったフランスの銀行のATMからキャッシングして用立てし、言い値の6000フランでチケットを購入して彼女に渡した。この時点で、キックオフ10分前。「ありがとう。お金は日本で必ず返すから」と言いながら、スタジアムの方へ駆けて行った。知り合いと二人で手を振りながらその姿を見送った。

「さ、行こう」と知り合いを促し、再びスタジアムを背に歩き出した。5分くらい歩いた時だった。我々を駆け足で追い抜いていくアラブ系のフランス人がいた。と、その時、知り合いがフランス語で何か言いながらそのフランス人を追い駆けだした。追いついて二言三言、話をすると駆け足でこちらに戻ってきた。

「あの人、チケット持ってるよ。5000フランなら売ってもいいって」「売ってもいいって、俺、日本に帰るって言っただろ」と答えると知り合いが、「いいや、あなたもこの試合を観るためにトゥールーズまで来たのだから、チャンスは逃したらダメだ」と強い口調で言った。その瞬間、背中から頭にかけて電気が走った。

無意識に眠っていたものが起こされたというか、本心にスイッチが入ったというか、「分かった。見なきゃいけないんだ」という気持ちになった。なぜだろう。あえて言うなら、欲がなくなり日本に帰ろうと無心になった時に何かが降りてきた、というところだろうか。

もうキックオフ寸前だったが、現金はさっき使い切ってしまったので、買うとなれば再びキャッシングしなくてはならない。しかし気持ちに躊躇や逡巡は一切なかった。淡々と現金を用立てしてダフ屋に払い、チケットを手にして「じゃ、行って来る」と知り合いに一言告げ、スタジアムに向かって駆け出した。

スタンドに駆け上がるまで、夢中で走った。キックオフからおおよそ10分後だった。目に飛び込んできた芝生の緑は光が差し込み神々しく輝いていた。その芝生の上で、日本が

アルゼンチンを相手に戦っていた。

試合後の夜、トゥールーズのレストランで知り合いに訊いた。

「なんで、あんなに強く、『この試合を観なきゃダメだ!』、と俺に言ったんだい？」

すると「あの彼女の『試合を観たい!』という気持ちに刺激されて、こっちも熱くなっちゃったんだと思う」と知り合いは静かに言った。

「だけども、5000フラン(約135000円)だぜ、まったく…」と言いながら、今日のチケットをポケットから取り出し、初めてじっくり見ると、右下に‘INVITAIION’と書かれているのに気づいた。

ボルドーの赤ワインがほろ苦かった。

きみもしろみも

雪平 蓮

玉子が好きなのです。TKGなんて小洒落た呼び名は嫌いだけど朝ごはんが一番のごちそうは玉子かけご飯。うまかっちゃんには必ず玉子を落とす慣わしだし、半熟の味玉が冷蔵庫に仕舞ってあると考えただけで毎日幸せ。目玉焼きは表面が白い奴も好きだし黄身がほぼ液状のままでも嬉しい。鰹節を削って引いた出しをたっぷり使った出汁巻き玉子を腰を据えて巻くとこれまた嬉しい。黄身だけを大事に取り分けて味噌漬けにして毎日ひとつずつ味わうと四日目くらいで思わず上等の日本酒を買いに走ってしまう。燻製にも凝ったことがあったし、熱々の茶碗蒸しにも捨てがたい滋味があります。でも一番忘れられないのは、幼い頃に耶馬溪で食べた大きな籠一杯の茹で玉子。固茹では好みじゃなかったけど、専売公社の塩も好きじゃなかったけど、止まらなくなって十個ほど続けざまに食べました。あれはきっと偏食児童だった私への叔母からのプレゼントだったのだと思うのです。

かな文字ばかり

瓦口 龍

春の夜をかな文字ばかり習ひけり 山口波津女

立春は、寒さの中での光の強まりにいち早く春を感じる節気です。2月4日ごろ、節分の翌日にあたります。暦の上ではこの日からが春です。早春、浅春、春めく、冴返る、春暁、春昼等と、春の季語は続きます。また、立春ごろには雀が声変わりして、独特の艶を

帯びた囀り（さえずり）を始めます。

光の強まりがホルモン腺を刺激して「鳥の妻恋」の季節の始まりです。また、それは猫にも伝染して、猫の恋、うかれ猫などと、季語にもなっています。年中声変わりしている原口酒店の常連さんも居ますが、雀、猫に限らず、人間にとっても……なのであります。

野良着脱ぐや妻の下着の春白紗 香西 照雄

妻抱かな春昼の砂踏み帰る 中村草田男

と、切ない句が続きます。

掲句は、春の夜をかな文字ばかり習ひけりと勉強一途の句のようですが、さて？……

原口酒店で一升瓶よりオレンジ鍋島を注いでもらいます。そして一口含みます。俳句は作者の手から離れると、作者の意図はともかく、受け取る者の好きな解釈に委ねられる部分が多くあります。

二口目、もちろん啓二さんと飲んでいるわけですし、だんだんと作者の思いの奥深い部分が伝わってきます。季語は春。角川書店俳句歳時記では、春の宵、春の夜と、夜が深まるにつれて、その一刻一刻は趣を変え艶めいた感傷をそそりながら移ってゆく、とあります。

作者は季語を通して何を語りたいのか。

ついに二杯目です。鍋島は旨い。

かな文字ばかり習ひけり、いろはにはほへと、もう完全に小沢昭一的なのであります。いろはのいの字はどう書くの。山口波津女さん、ゴメンナサイ。

俳句は、五七五の奥が深いのであります。

来店お断り

大分長浜角打ち学会事務局長：みじんこ

角打ちにはローカルルールが存在する。

ただ細かなルールがあっても基本はどこに行っても変わらないと思っている、それを踏まえたうえで私たちは美味しい酒を楽しむのです。

そのルールは慣れた客なら店の空気や客の振る舞いを見て理解できるが、初心者は素直に店主や客に聞くのが無難である。

大分市の「御手洗酒店」に通い始めて5年、これまでにそのルールを破り、キルスコア（来店拒否）された客を何人も見てきた。そのほとんどが店内で酔っ払ってしまった人たちで、酔ってもすぐに帰ればいいのですがそのほとんどが帰らずに更に呑もうとする、店側はもうそれ以上は酒を売らない。

そうなると言葉が乱暴になり店に文句を言い始める、「売ってもいいが持って帰って呑め！」、おおかた何処かで見た光景が繰り返される。こうなると店側も次回から来店拒否である、素面で来店しても一切売らない。この強気な商売は常連客のことも考えてのこと

で非常に頼もしい。

角打ち、そこには酒を安く楽しむためのルールがある、しっかり守って旨い酒を呑みたいものである

『めざせ冬眠』

角打ちのピアニスト 谷口淑子

冬眠したい。

大すきな12月を過ぎ 年が明けると寒さは厳しくなり
まちも静かにしんとなる
極度の寒がりの私には まったくもって この寒さが合わない
からだに全然合わない 具合が悪い
かといって 常夏の場所へ移住する気はない
四季がすきだから
にっぼんがすきだから

だから

ずっと考えている のは
1月～3月まで冬眠計画 冬ごもり
要するに 休業
今はまだ 3ヶ月も休業できるレベルじゃないけれど
60歳くらいまでに そうしよう
そのレベルまで行こう

そうしたら

12月31日の大晦日に
市場をめぐり
すきなご飯 たとえばゆり根 ブリ 春菊
おやつ たとえば木町にあるオランジュの焼き菓子 湖月堂のひとつ栗
お酒 もちろん鍋島オレンジラベルに びわや 梅の果実酒
3ヶ月分を買いこんで
ぬくぬくと ひっそりと うちで過ごす
3ヶ月の間
読みたかった長編を読んだり
弾きたかったピアノ曲を弾いたり
会えなかった友達をよんで騒いだり
刺繍 かぎ編み ミシン 執筆

ああ 想像するだけでしあわせ

といろいろにイメージしながら
今日もいそいそ出かける 私
この寒い中 ほんとにも〜と ぶつぶついいながらも
東京の妹から ハイカラなプレゼントがいっぱい入った袋の中にあった
由紀さおりのCDから「マシュケナダ」をかけて
一番すきな服に着替える

♪ 1、2、3、4、5、6、7、8

1、2、3、4、5、6、7 マシュケナダ

くるしいときには いつでも このサンバを踊るの〜

夢みるためにっ ♪

いつか冬眠できる日を夢みて
音楽に救われながら
誰かのやさしい小さなプレゼントにほっとしながら
でも きっと冬眠終盤
3月がはじまるころには うずうずしだすんだらうなあ
こたつでぬくぬくちびちびのお酒に飽きて
うれしいひとたちと わいわいのお酒に飢えた
じっとしてられない私は

文学のこみち “尾道”

清張の会事務局長：上田喜久雄

前号では朝鮮通信使までも「日東第一景勝」と絶賛した鞆の浦のことを書きましたが今回はその翌日訪ねた尾道のことを少し書いてみたいと思います。

尾道はラーメンがことのほか有名で、戸畑駅前のサティ1階の“麵屋天狗”のポスターにも「尾道ラーメンは瀬戸内の旨さがぎっしり詰まった西日本を代表する醤油ラーメン」と大書され、あわせて尾道市は『坂の街』『文学の街』『映画の街』として全国的にも大変有名な街です、と紹介されています。

尾道を舞台にした映画に、小津安二郎監督の「東京物語」（1953年）がありますが、もう一つ、吉永小百合の「うず潮」（1964年）があります。

これは女学校を卒業したばかりの芙美子が風呂敷包み1個だけを持って、期待と不安を胸に尾道駅から夜汽車に乗って東京に旅立つシーンが印象に残りますが、私が今回知ったのは、「花の命は短くて苦しきことのみ多かりき」には、後に続く句があるということです。

「花の命は短くて苦しきことのみ多かれど風も吹くなり雲もひかるなり」で、これで救われた感じがします。

文学の街というだけあって、文学のこみちには自然石に刻まれた25の文学碑があり、尾道を愛した文人の思いが伝わってきますが、さらに「暗夜行路」で有名な志賀直哉、歌人の中村憲吉の旧居は歴史文化遺産として大事に保存されています。

まだまだ尾道には見どころがいっぱいあり、もう一度訪ねたい街です。

『坂』と『文学』と『映画』の話に夢中になりお酒を忘れていましたが、お昼にちゃんと料亭「藤半（ふじはん）」でおいしいビールをいただきました。その美味しかった事は言葉に表せません。

甘い記憶

櫻木 大祐

いつもと変わらぬ二日酔いの朝。

いつもと変わらぬ？

いや…何かが違う…

頬に触れるサラサラの髪感触。甘いシャンプーの薫り。全裸…全裸！？

目を閉じたまま、モヤのかかった脳に鞭を打つ。

昨日は確か…あの店に閉店までいて…

女の子が3、4人いて…

珍しく調子よくしゃべって…その後……

駄目だ…思い出せない…

もしや、ヤラかしちゃったのか？

イヤイヤ、俺がそんな破廉恥なことは！

でも勢いでってことも…

身動きもせず、自問自答すること5分…いや10分はたっただろうか？

俺は決意した。

ゆっくりと目を開ける。

…あれ？いない…？

そして、恐ろしい勢いでよみがえる記憶の断片。

あ…そうだ。

昨日、TSUBAKIを買って…

シャンプーして…

そのまま寝たんだっけ…

ははっ…ははっ…

あ～あ、自分のヘタレが嫌になる！！

酒三訓

蘇宅 韓五郎

第一訓「飲むなら酔うな酔うなら飲むな」

酔い方には「ほろ酔い」「千鳥酔い」「泥酔」などがある。この差は、酒の量ではない。酒を飲む前の心の状態に起因する。悪酔いせぬように酒は、心の状態を正常にしてから飲むべきである。

第二訓「飲むなら褒めろ褒めなきや飲むな」

昼間の経営会議・営業会議等においては、遠慮無く批判し、反省し、賛成、反対の意見を述べる。しかし、酒席では、ひたすら褒め称え、褒めちぎり、褒め罵り、明るく飲むべし。

第三訓「飲むなら払え払わなきや飲むな」

若くして酒を飲むなら、自ら払える程度に飲むべし。誘い酒は、二人分を支払うべし。誘われ酒は、一人分を支払うべし。ご馳走になるときは、自ら支払える程度に飲むべし。

昨年、たまたま教えていただいたた言葉で、非常に簡潔で分かりやすいが、行うは難しいである。

第一訓、酒とは嬉しいとき、悲しいとき、楽しいとき、鬱積したときに呑み酔うものと思っていた。が、まだ修行が足りないのか平常心で呑んだことがない、未だに角打ち見習いの身である。意味の深い言葉として有り難く感じる。

第二訓、大概の酒の場では批判が酒のアテとなり酒がすすむものであるが、褒めあげて楽しく呑むことは難しくはない。できる限りの努力をしてみよう。

第三訓、拝承である。

酒とは、酒の場、会社関係、友達関係、家族関係を壊し、また、体を壊すものとなる。反対に良くする道具にもなる、厄介なものだがコントロール良く呑みたいものである。第四訓として、「呑むなら乗るな、乗るなら呑むな」を追加したい。これについては、何も付け加えることはないのでは。

よき場、よき友、よき酒でよき刻を堪能している今、至福であるが平常心は難しい。

句会か苦会か

清張の会会長：大野真由美

俳句を作ってみようと思った。きっかけは、松本清張の「菊枕」という作品を読み、杉田久女に出会ったことに始まります。

英彦山に行った時、「舂して山ほととぎすほしいまま」の句碑に出会い、とても衝撃を受けました。すごい句だなと思ったのと同時に、何て気の強い女性俳人なんだろうって。

それ以来、彼女の句に出会う度に、益々、久女が好きになっていきました。彼女の聡明さと美しさに魅せられました。私も句を作ってみたい――。

五・七・五の十七文字で表現する短い文学は、思うよりずっと難しいものでした。週一回の句会に、5句作って参加します。これがなかなか出来ず、句会が苦会となることがほとんどです。それでもめげずに駄句にいどみ続けております。

そんな私を後押ししてくれるのは、句会のあとの美酒であり、先輩諸氏の助言です。酒をおいしく頂きながらあれこれと俳句談義も楽しいですよ。さあ、しぼりたての新酒でも飲みながら、次の句会の5句作ろうっと。

―― 酒蔵に人の湧き出る春祭 ――

近頃の飲み会

酒夢人：諸岡明保

若い頃の飲み会といえば先輩達に連れられてか、会議・仲間の集りやその後での流れ次第であったような気がする。勿論、当時はお互いにお金なんて物はあまり無くとも何とか飲めたものであった。参加者の持ち合わせの金でどうにかなったもんだ。

客引きなんぞは特殊浴場以外皆無であった。誰かが行きつけの店で飲み倒した。

約一年前より「カフェバー」のお手伝いをしているが、最近の飲み会予約内容を見ると様子がまるで違うのである。80%以上の予約は女性達が行っているのである。会社単位といえども取り仕切るのは女性である。

同業店のオーナー達と情報交換会を定期的やっているが、やはり同じ様子である。先日もヤフーの貸切パーティー（130名）があり男性と女性の比率は半々、しかし、飲み物の主流はソフトドリンクでアルコール類は女性達が楽しんでいたそう。店側としては利益は上がるが、本当に若い人達の、特に男性の酒離れは激しいものがある。

そもそも飲み会であるのに「スイーツ」は何種類出るのか、ケーキ類で酒を飲む事に若い人達は何の違和感も持っていないのだろうか？

仕事柄、ホテルでのパーティーにはよく行くがスイーツカウンターにはあまり足が向かない。ウイスキーのテスティングの時はチョコを頂く事はある。先日も「マッカラン」の試飲会を店で行ったが、最後まで真剣に試飲していたのは女子達で、男達は57年物をストレートで試飲せずにハイボールで。

50年後は女性達が飲んでいるのを横目で見ながら男達は料理や皿洗いなどを粛々としているのではないだろうか？

我が家もその兆しが… お正月に伊勢神宮に家族で旅行したが、フェリーの船室で家族飲み会に家内と娘二人に孫二人全て女、男は小生のみ。盛り上がり、理想の父親、夫など話題の方向性は小生に居心地が悪い方向にどンドンと行き避難のみ。アルコールの調達・

肴、孫達の相手やらでまさに 50 年後の世界を早くも体験したのである。

飲み会=パーティー、同じだろうが欧米の人達は人との触れあいに慣れているような気がする。その場に直ぐ溶け込むが、まだ日本人はお付き合いで参加している。特に男より、ひよつとすると飲み会の楽しみ方は女性の方が楽しむ術を心得ているのかも知れん？

間違いなくそうである。その極みは「女子会」の多い事、「男子会」なんぞは見たことがない。また参加者はおそらくゼロ？ 確信する。何時かは「男子会」をやらねばならぬ。男達は単なる置物？ ガードマン？ 割り勘要員？ しかしそれでも男達は参加するのだ。

格式高き「はらぐち会」は男子会？ それとも？ もしや女子パワーが津波のように。最近はあまり時間調整がつかず戸畑では飲む事もあるのですが。先日も某氏達と偶然に出会いましたよ、お互いにご婦人連れでなくてよかった。

結婚披露宴の二次会も商売としては有り難い事であるが、祝儀とは別に二次、三次会の会費迄個人出費で 30~40 名単位で来店する。最近の結婚披露宴出席者も経費が嵩むものだ。世の中不景気風が… 結婚適齢期の人達はお互いに経済的に大変だろう。

小生も仲人を 6 回やったが、この頃は結婚披露のご招待状を頂くがどれも仲人名はない。世の中の流れであろうが何か淋しいものである。

小生の娘も 4 月に嫁ぐが同様である。〇〇家と〇〇家の結び付きから個と個の「絆」を大事にする決意がさせるのであろう。本来は家庭・家族とは個と個からが原点だと思う。良い事だ。

25 日にサントリーのバレーボールの試合に北九州総合体育館に招待された。チーム VIP のカードを頂き応援に会場へ、最前列に今期対戦相手に一度も勝てない、しかもワンセットも取れてない相手との試合、テレビとは違い迫力はすごい、バレーボールを見直した。選手達に感謝である。

4 セットまで試合が進んだ事はワンセットは取れたのだ。応援のし甲斐があった。試合後、応援団とそれこそ「飲み会」で多いに盛り上がった。チアリーダー達の元気のある事よ、これぞ「飲み会」なりであった。実に心地よい「飲み会」であった。

「ケ枯れ」の危機を遠ざける

吉本 光一

ケ（日常生活）のエネルギーが枯渇した「ケ枯れ」の日に、私たちの先祖はハレの日の酒宴を催して身を清めたことを前に書いた。しかし、人々の本当の願望は酒宴の酒を酌むことより、ケ枯れの日を少しでも遠ざけることにあったに違いない。長年狭心症を患ったすえ生命の危機を直感して入院したものの、危機に対応する医療の手が及ばず、怒りをかみしめながらその夜、67 歳の命を失った男性 B さんの面影が、同じ病気で心臓の手術を

受けるため入院なさる天皇陛下の写真に重なって見えた。今回は、天皇陛下の狭心症との闘病に沿って、ケ枯れの危機を遠ざけるための皇室の取り組みに目を向けてみよう。

狭心症患者の危機回避の期待と現実

北海道の地方都市に住むBさんは、20年前からの高血圧と冠動脈硬化に加えて労作性狭心症を患い、ニトログリセリンを服薬していた。その薬がだんだん効かなくなり、その日は夜になっても痛みがおさまらず、合併症(心筋梗塞)を直感した。家で心臓が停止したら手遅れになる公算が大きいのが、病院にいれば、とっさに再起動の処置などもしてもらえる……そう期待したのだろう。洗面道具と整理しかけた在職中の記録ノートを携え、自分でハイヤーを呼んで歩いて乗り、地元の市立病院の救急外来を訪れて入院した。

ふだんから健康管理に熱心で、血圧計を買い求めて日夜記録し、「心臓の負担は病状を悪化させる」といってバイクを愛用した。いつもはかかりつけの開業医に通院していたが、この夜はあいにく外出中で、その帰りを待ちきれずに疎遠な病院を訪れた。

病歴や検査値などの判断材料を持たない病院の当直医は、点滴を2度と注射、その後X線装置を病室に運び、体の向きを何度も変えて撮影した。このとき、よほど苦しかったのだろう。周囲のだれもが温厚な人柄という、この人の口から「バカヤロウ」と怒声が漏れ、その直後に強い発作が起きて意識を失った。家族の知らせで当直医が駆けつけたのは、息の絶える寸前だった。Bさんが病院に期待したのは、予測された生命の危機への対応、すなわち危機の回避、それができないなら危機を少しでも遠ざけることを目指すチャレンジだった。その期待と現実との間には、大きなズレがあった。

新聞の編集委員在職中だったので、これを目の当たりにして「心臓病救急態勢の断層」について、新聞のコラムに書いた(1979.3.19. 朝日新聞夕刊)。

このとき、心臓内科医の日野原重明先生から次のコメントを頂いた。

「狭心症の人で発作が頻繁になったら、心筋梗塞との中間型とみられ、もはや心筋梗塞の予防は不可能だ。一番大事なことは、集中治療室に入れて不整脈が起こるのを連続監視し、起きたらパッと電気ショックをかけて拍動を正常に保つことだ。それには集中治療室が不可決だ」

「心筋梗塞の急性期死亡率がかつての33%からいま12~13%にまで下がったのは、集中治療室の役割が大きい」

この意図に沿った心臓発作時の応急手当が集中治療室の外でも行えるように、その後、一般の人でも扱える電気ショック装置AED(自動体外除細動装置)が開発され、いまは公共の場に設備されている。

「危機待ち」の医療から「危機を遠ざける」医療へ

天皇陛下の狭心症について、詳細は公表されていないが、関係者の話を総合すると相当長年月の病歴があり、この間、冠動脈拡張薬などの内科的治療が続けられてきた、と推察される。狭心症の患者は全国で80余万人と推定されているが、このうち、心臓バイパス手術を受けるのは約2万人。人工心肺も輸血も要らない、したがって手術時のリスクや脳梗塞などの合併症の危険も少ない優れた心臓手術の手技が普及しているにもかかわらず、外科治療の件数はアメリカの40万人に比べ格段に少ない。なぜ、いまの時点で心臓バイ

パス手術なのか、と不思議に思う方も多いのではないか。

国と国との間の戦いでは、第二次大戦まで戦略目標を対戦国の首都の制圧に置いていた。医療の場での戦略目標とはいえば、究極的には生命・身体の危機を回避することである。危機回避のための作戦・戦術のことを、医療用語では「介入」という。感染症相手の介入では、抗生物質や抗菌薬の活躍によりめざましい成功をおさめることができた。

その結果、日本人の疾病構造は、20世紀半ばに感染症から生活習慣病へと大きく様変わりし、それとともに、医療の主軸は速戦即決の短期決戦型から長期持久戦型へとシフトした。生活習慣病と戦う現代の医療の泣きどころは、長期にわたる慢性病への介入で決定打が出ず、危機的な合併症が起きて初めて主力の出番を迎えるものの打算の悪い戦いを余儀なくされることだ。

「危機待ち」の医療の代表例に糖尿病がある。糖尿病自体が生命を脅かすことは極めて希だが、終末期の合併症（腎不全、網膜症、神経障害、動脈硬化など）が生命の危機や失明を招く。糖尿病を封じ込める介入が効を奏さないために、15～20年にわたる持久戦のあげくに生命・身体の危機に見舞われ、人工透析や入院、集中治療など、危機が大きいほどより高度な医療が求められる。

狭心症の場合は「危機待ち」の医療から「危機を遠ざける」医療へとシフトがすでに始まっている点だが、糖尿病とは異なる。心臓病王国アメリカで60～70年代に始まった介入の試みのなかで、危機の回避はできないもののある程度遠ざけるのに成功するものが認められるようになったのだ。

その一つが心臓バイパス手術で、クリーブランド・クリニックの2人の外科医、ファバローロとエフラーが、67年に創始したものだ。それ以前にも「内胸動脈結紮術」、「内胸動脈心筋内移植」などの外科手術法が考案され、とくに後者は世界で広く行われたが、後にどれも介入の効果が認められないことが証明され姿を消した。ファバローロらの方法は、心臓の筋肉に栄養と酸素を供給する血管（冠動脈）の狭窄部に、本人の腿の皮膚の静脈を切り取ってバイパス移植するもので、内科治療を受けた患者との生存率の長期比較試験でも、適切な患者を選んで適用すれば内科治療より優れた効果があることが実証された。発表から10年後には全米で年間5万人余、いまでは年間約40万人がこの手術を受けているといわれ、心臓バイパス手術は「危機待ち」医療の堅い殻を破る立役者と評価されるに至った。

適切な患者に適切な医療

では、わが国で心臓バイパス手術の件数が、アメリカと比べ人口当たりで10分の1に過ぎないのはなぜなのか。それは、わが国では心臓カテーテルを応用したPTCA（経皮経管冠動脈形成術）などの治療手技が内科医によって広く行われ、バイパス手術と同様介入の効果が認められたという、わが国特有の事情によるものであり、心臓外科医の技術水準によるものではない。

心臓バイパス手術が薬剤を主力とする内科的治療より優れていることを実証するために、この2つの治療法の間で治療後の長期生存率がアメリカで調べられた。そのときに副産物として、治療に当たって「適切な患者を選ぶ」ことの重要さが注目された。1人の病人についていうなら、適切な時期に適切な医療を行うことである。

詳しくいうと、心筋梗塞の発症最中とかそれに近い重症な症例は、生命のリスクが大きく外科手術の対象から外される。また血管の狭窄が小さい症例（狭窄率 75%以下）には侵襲の大きい外科手術をあえてする必要はない。一方、内科的治療には限界があり、アメリカでの長期臨床試験では、内科的治療グループの 3 分の 1 の人は冠動脈拡張薬などの薬剤が効かず、結局はバイパス手術を受けた。これらの人の予後も初めからバイパス手術を行った人と長期成績は同じだった。以上の知見から、重症でも軽症でもなく、かつ内科的治療が有効でない症例がバイパス手術の対象として最も適切だ、という結論に到達する。

バイパス手術が適切な患者は、もう一つの治療法のカテーテル治療と競合する領域でもある。アメリカで心臓外科医が勢力を広げている間に、わが国では延吉正清・現小倉記念病院長を中心とする心臓内科医によって、その医療が確立、普及を遂げ、いまでは日本の心臓医療のお家芸と国際的評価も高い。狭心症治療用のカテーテルの売上高は年間 27 万本にのぼる。

この技術は、心臓の造影検査用の心カテーテルを応用して開発された特殊なカテーテルを駆使する技法で、最初は冠動脈の狭窄部でカテーテル先端の風船を膨らませて動脈を押し広げるだけの簡単な装置（PTCA）だったが、再狭窄を防止するための金属製の筒（ステント）を狭窄部に取り付ける技法や、動脈の内側を塞いで硬化した邪魔物を超高速回転のカッターで切り取って貫通させるトンネル掘削機のマイクロ版など、さまざまな応用技術が実用化され、ニューデバイスの名で定着している。バイパス手術に比べ、生命のリスク、所要時間、入院日数、医療費などすべての面でバイパス手術より優れているが、屈曲部の病変には対応できないのが弱点だ。

天皇陛下の、内科的治療が効かなくなり、狭窄の病変が冠動脈の屈曲部にあるという病状からバイパス手術の治療方針が導き出されたのは、ごく自然な判断によるものと考えられ、皇室の医療が「危機待ち」から「危機を遠ざける」医療へと変容を遂げたことを告げるものといえる。今回の手術をきっかけに、生活習慣病に対する「危機を遠ざける」医療に弾みがつくことを期待したい。

ライシャワー米駐日大使が東京の大使館前で暴徒に襲われ、国家公務員共済組合連合会・虎の門病院に入院して治療を受けたのは、東京オリンピックが開かれた 1964 年のことだ。徳川幕府の西洋医学所開設から 103 年（当時）、わが国で最古の歴史を持ち、最高の医学の権威を自認する東京大学医学部附属病院にとって、戦後初めての外国要人の診療という大役が公的病院とはいえ一民間病院に任されたことは、よほど大きなショックだったに違いない。2001 年に入院治療の新病棟を建てたとき、VIP の入院に耐えられるよう、1 日 25 万円の特別病室（差額病床）を新設した。あまりの高額で稼働率が年間 50% を切り、病院の赤字の元凶となったため、独立行政法人へ移行したときに 18 万円に値下げしたという。

ちなみに、わが国でいま最も高価な特別病室は、東京慈恵会医科大学附属病院（東京・港区）の 1 日 21 万円（131 平方メートル）。これも、開設当時は 36 万円だった。



飛び梅が咲き始め、露の臺も頭を出し、シロウオ漁も始まった。何となくウキウキする季節がそこまで来ている。桜も準備をしている、酒が呑めるぞー酒が呑めるぞー。

「鍋島」は別格として、今年の推奨酒は、大分県杵築市(有)中野酒造の「ちえびじん」、福岡県八女市(株)高橋商店の「可也」、焼酎は福岡県朝倉市(株)福徳(株)「福徳(株)」、んーん美味しいです。

前号より、「はらぐち閑話」の字体を変えました。筆者は、はらぐち酒店の若女将です。

「まあ、ゆっくり世間話をしていきませんか。お茶でなくお酒を呑みながら」。

投稿をお待ちします。題材、文の長短を問いません。「酒」に縁のある内容であれば言うことなしです。

投稿は、はらぐち酒店に預けていただくか、kei2@bronze.ocn.ne.jpへ宜しくをお願いします。

「はらぐち閑話」は、はらぐち酒店HP (<http://homepagel.nifty.com/haraguchi/sake/>) もしくは、戸畑はらぐち酒店で検索してくださいの「かくうちの部屋」でご覧いただけます。

次回発行は5月10日(4月29日締切り)とします。

(今朝の鮭)

はらぐち酒店：北九州市戸畑区中本町4番9号

電話093-871-2150

sake-tobata@nifty.com